地 理 歴 史

1　学習指導と評価の工夫・改善

地理歴史科の各科目の学習指導においては、自ら学び自ら考える力など確かな学力を向上させるために、指導内容の精選を図るとともに、学び方を学ぶ学習や課題解決的な学習をより一層充実させることが求められている。また、生徒の興味・関心を生かした学習活動を積極的に取り入れ、個別指導やグループ指導を導入し、個に応じたきめ細かな指導を展開することが大切である。

地理歴史科の学習を通じて「歴史的思考力」や「地理的な見方・考え方」などを育成するには、指導と評価の一体化をすすめ、学習指導の改善を図ることが求められる。そのためには、地理歴史科及び各科目の目標の実現状況や生徒一人一人の学習の進歩の状況を的確に把握し、その結果を学習指導の改善に生かす必要がある。また、生徒の学習意欲を向上させ、学習を促進させるために、指導の成果としての評価だけでなく、指導の過程における評価を充実させる視点も重視し、個に応じた指導の工夫を図ることが大切である。

各学校においては、学校や生徒の実態に合わせて、目標に準拠した評価の計画を適切に作成し、評価規準や評価方法をわかりやすくシラバスに掲載するなどして、評価の方針等を生徒や保護者に公開するとともに、学校全体での生徒の学習状況についての自己点検・自己評価を通じて、評価規準や評価方法の改善を図り、評価の客観性や信頼性を高めることが重要である。

2　評価方法の改善・充実

(1)評価計画の作成

ア　作成上の留意点

○　学習指導要領に示す教科の目標と内容から、評価計画を盛り込んだ年間の指導計画を作成し、それに基づいて内容のまとまり（単元など）ごとの指導と評価の計画を作成する。

○　評価規準とは、評価のよりどころとなる学習指導の目標をその内容で示すものである。つまり、評価規準を生徒が学習の結果として身に付けている具体的な状況を示すものとして作成する。

○　評価規準については、学習指導要領解説並びに国立教育政策研究所が作成した「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料（高等学校）」を活用して、学習指導要領の内容に示される大項目もしくは中項目毎に作成し、個々の学習活動に対応させてさらに評価規準を具体化する。なお、評価規準については「おおむね満足できる」状況（Ｂ）に視点をおいて作成する。

○「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、「資料活用の技能・表現」、「知識・理解」の４つの評価の観点が年間を通してバランスがとれるよう配慮する。

○　１時間毎の授業において、多くの観点を設定するのではなく、内容に応じていくつかの観点を設定して評価する。

イ　評価計画表の例

科目名	世界史Ａ			
大項目名	(3)現代の世界と日本		中項目名	イ　二つの世界戦争と平和
単元の目標	第一次世界大戦と第二次世界大戦の原因や総力戦としての性格、それらが及ぼした影響を理解させ、平和の意義などについて考察させる。			
評価の観点	関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
内容のまとまりごとの評価規準（中項目）	第一次世界大戦と第二次世界大戦の原因や性格、影響、平和の意義などに対する関心を高め、意欲的に追究するとともに、国際社会に主体的に生きる国家・社会の一員としての責任を果たそうとしている。	第一次世界大戦と第二次世界大戦の原因や性格、影響、平和の意義などについて考察し、公正に判断している。	第一次世界大戦と第二次世界大戦の原因や性格、影響、平和の意義などに関する資料を活用するとともに、追究し考察した過程を適切に表現している。	第一次世界大戦と第二次世界大戦の原因や性格、影響、平和の意義について理解し、その知識を身に付けている。
評価規準の具体例（中項目）	第一次世界大戦と第二次世界大戦を中心にした20世紀前半の国際政治の流れに対する関心を高め、意欲的に課題を追究するとともに、現代の戦争の特質と平和の意義について考え、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚をもとうとしている。	第一次世界大戦と第二次世界大戦を中心にした20世紀前半の国際政治の流れ、現代の戦争の特質と平和の意義などについて考察し、二つの戦争の原因や総力戦としての性格、それらが及ぼした影響について公正に判断している。	第一次世界大戦と第二次世界大戦を中心にした20世紀前半の国際政治の流れ、現代の戦争の特質と平和の意義などに関する資料を活用するとともに、考察した過程や結果を適切に表現している。	第一次世界大戦と第二次世界大戦の原因や性格、影響についての基本的な事柄を理解し、その知識を身に付けているとともに、平和や人権の確立への願いについて理解し、その知識を身につけている。

中項目	指導段階	学習活動	評価の観点 関	思	技	知	学習活動における評価規準	評価方法
二つの世界戦争と平和	第１時（導入）	・第一次世界大戦から第二次世界大戦までの主な出来事を略年表にまとめるとともに、対立関係の略図を作成し、２つの世界戦争の原因、性格、戦争がもたらした世界の変化について関心や疑問をもったことと、その理由をワークシートにまとめる。	◎				・略年表と略図の作成を通して、第一次世界大戦と第二次世界大戦を中心にした２０世紀前半の国際政治の流れに対する関心を高め、意欲的に課題を追究しようとしている。	観察 ワークシート
	第２時（課題設定）	・前時に関心や疑問をもったことを基にグループで話し合い、課題を設定し、課題を追究する計画等を立てて、ワークシートにまとめる。		◎※1			・第一次世界大戦と第二次世界大戦を中心にした２０世紀前半の国際政治の流れを踏まえて、現代の戦争の特質と平和の意義などについて考察できる課題を設定するとともに、設定に至る過程や主題学習の計画等について、適切に記入している。	ワークシート
	第３時 第４時 第５時（課題追究）	・設定した課題とその理由について、グループごとに、役割分担をして発表するとともに、他グループの発表を聞き、自分のグループが設定した課題を再検討する。	◎				・設定した課題とその理由を発表している。また、他グループの発表をよく聞いている。	観察
		・２つの世界戦争の原因や性格、それらが及ぼした影響について教師の説明を聞き、ノートにまとめる。				◎	・第一次世界大戦と第二次世界大戦の原因や性格、影響についての基本的な事柄を理解し、その知識を身に付けている。	ノートの記入状況から評価する
		・課題について、前時の学習内容を踏まえてグループで分担を決め、発表準備をする。			◎		・課題について前時の学習内容や資料集等を効果的に活用するとともに、考察した過程や結果をグループごとにまとめている。	グループでまとめた発表資料から評価する
	第６時（課題発表）	・グループごとに、各自が分担した内容を発表するとともに、自らの発表についての反省や評価をワークシートに記入する。		◎※1			・自らの発表に対して、発表内容を踏まえて公正に判断して、評価している。	ワークシート

科目名	日本史Ａ			
大項目名	(2) 近代日本の形成と 19 世紀の世界		中項目名	イ　明治維新と近代国家の形成
単元の目標	文明開化などに見られる欧米文化の導入と明治政府よる諸制度の改革に伴う社会・文化の変化に着目して、開国、明治維持から自由民権運動を経て立憲体制が成立するまでの我が国の近代国家の形成について理解させる。			
評価の観点	関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
内容のまとまりごとの評価規準（大項目）	開国以後、明治維新を経て近代日本が急速に形成された過程に対する関心と課題意識を高め、多様な学習方法を通して意欲的に追究している。	開国以後、明治維新を経て近代日本が急速に形成された過程から課題を見いだし、国際環境と関連付けて多面的・多角的に考察するとともに、国際社会の変化を踏まえ公正に判断している。	開国以後、明治維新を経て近代日本が急速に形成された過程に関する諸資料を収集し、有用な情報を選択して活用することや、博物館や文化遺産を活用することなどを通して、歴史的事象を追究する方法を身に付けるとともに、追究し考察した過程や結果を適切に表現している。	開国以後、明治維新を経て近代日本が急速に形成された過程についての基本的な事柄を国際環境と関連付けて理解し、その知識を身に付けている。
評価規準の具体例（中項目）	開国、明治維新から立憲体制が成立するまでの近代国家の形成に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究している。	開国、明治維新から立憲体制が成立するまでの近代国家の形成から課題を見いだし、文明開化などに見られる欧米文化の導入と明治政府による諸制度の改革に伴う社会・文化の変化と関連付けて多面的・多角的に考察するとともに、国際社会の変化を踏まえ公正に判断している。	開国、明治維新から立憲体制が成立するまでの近代国家の形成に関する文献、新聞、絵画、地図、写真、統計・グラフなどの諸資料を収集し、有用な情報を選択して活用することを通して、歴史的事象を追究する方法を身に付けるとともに、追究し考察した過程や結果を適切に表現している。	開国、明治維新から立憲体制が成立するまでの近代国家の形成についての基本的な事柄を国際環境と関連付けて理解し、その知識を身に付けている。

中項目	指導段階	学習活動	評価の観点 関	思	技	知	学習活動における評価規準	評価方法
明治維新と近代国家の形成	第１時（導入）	・開国以後、明治維新を経て近代日本が急速に形成された過程について概観する。	◎				・近代国家形成の過程に関心をもち、意欲的に考えようとしている。	発問等に対する反応から評価する。
	第２時 第３時 第４時 (課題追究)	・明治維新から自由民権運動の展開、立憲体制の確立について、ワークシートに記入し、北海道の開拓の様子や世界の動きも記入する。			◎		・政治制度、社会や経済、文化に関すること、北海道の開拓に関することなどをワークシートに工夫して記入している。。	ワークシート
		・ワークシートに記入したことを見て気づいたこと、疑問に思ったことを各自がまとめる。	◎				・近代日本が急速に形成されたことに関して意欲的に追究しようといている。	ワークシート
		・気づいたこと、疑問に思ったことをもとに、グループごとに話し合い、追究する課題を設定する。 （学習課題の例） ・なぜ、西郷隆盛は反乱を起こしたのか。 ・なぜ、自由民権運動の指導的な立場の人は、土佐藩出身が多いのか。		◎			・国際社会の変化を多面的、多角的に考察し、さらに明治維新から立憲国家が成立するまでの近代国家の形成から課題を設定している。	観察
		・各自の課題の追究方法をグループで話し合い、各自が追究計画を立案し、ワークシートに記入する。		◎			・課題を見いだし、課題を追究する方法を考え、追究する計画を立案している。	ワークシート
		・必要な資料やデータを整え、課題について調べ、グループごとに発表のための準備をする。				◎	・近代日本の歴史的事象について理解し、基本的な事柄を知識として、身に付け、近代日本の形成の特徴を把握している。	観察
	第５時（課題発表）	・グループごとに設定した課題、設定理由、調べたことについて発表する。			◎		・歴史的事象を追究する基本的な手法を身に付けているとともに、追究し考察した過程や結果を適切に表現している。	発表の内容を含めた観察
	第６時（まとめ）	・発表の反省、次の学習で学びたいことを等を各自が報告書にまとめる。			◎		・調べ学習、発表などの学習指導で理解した内容や身に付けた思考力などを表出できる。	報告書の記入状況から評価する
		・ペーパーテストを実施する。		◎ ※2			・ 近代国家の形成について課題を見いだし、欧米文化の導入と明治政府による諸制度の改革に伴う社会・文化の変化とを関連付けて多面的・多角的に考察している。	ペーパーテスト

科目名	地理Ｂ			
大項目名	(3)　現代世界の諸課題の地理的考察		中項目名	エ　近隣諸国研究
単元目標（中項目）	近隣諸国の生活・文化を地域の環境条件と関連づけて追究し、日本との共通性や異質性及び異文化を理解し尊重することの必要性をとらえさせるとともに、近隣諸国との交流の在り方や日本の役割などについて考察させる。			
評価の観点	関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
内容のまとまりごとの評価規準（中項目）	近隣諸国の生活・文化に対する関心と課題意識を高め、それらを地域の環境条件と関連付けて追究する学習に意欲的に取り組み、異文化を理解し尊重することの必要性、近隣諸国との交流の在り方や日本の役割をとらえようとしている。	事例として取り上げた近隣諸国の生活・文化に関する地理的事象から課題を設定し、それらを地域の環境条件と関連付けて多面的・多角的に追究するとともに、近隣諸国との交流の在り方や日本の役割を考察している。	事例として取り上げた近隣諸国の生活・文化に関する資料を収集し、学習に役立つ情報を適切に選択、活用することを通してそれらを地理的に追究する技能を身に付けるとともに、そうした追究、考察の過程や結果をまとめたり、発表したりしている。	事例として取り上げた近隣諸国の生活・文化を地域の環境条件と関連付けて理解するとともに、異文化を理解し尊重することの必要性、近隣諸国との交流の在り方や日本の役割を理解し、それらの知識を身に付けている。
評価規準の具体例（中項目）	東アジア、東南アジアの国々やロシアの近隣諸国の生活・文化に対する関心と課題意識が高まっている。	事例として取り上げた近隣諸国の生活・文化に関する地理的事象を基にして適切な課題を設定している。	事例として取り上げた近隣諸国の生活・文化を地域の環境条件と関連付けてとらえるために、地図や画像や文書の読み取り、統計のグラフ化や地図化などを通して、学習に役立つ情報を適切に選択して活用している。	地域の環境条件と関連付けて追究する事例として取り上げた二つ又は三つの近隣諸国の生活・文化を多面的・多角的に理解し、その知識を身に付けている。

中項目	指導段階	学習活動	評価の観点 関	思	技	知	学習活動における評価規準	評価方法
エ　隣諸国研究	第１時 第２時 （導入）	・ワークシートに、アジア全域の略地図を描き、東アジア、東南アジア、ロシアの国名や位置を確認し、大地形・気候区分・農業地域区分・宗教分布など、さまざまな地理的な事象についての境界線を記入する。	◎			◎	・日本の近隣諸国の自然・生活・文化に対する関心と課題意識が高まっている。 ・日本の近隣諸国の国名と位置や、それらの国々における、さまざまな地理的な事象について理解し、その知識を身に付けている。	ワークシート 観察 ワークシート
	第３時 第４時 第５時 （調べ学習）	・東アジア、東南アジア、ロシアから、グループ単位で調査する国を選び、それぞれの国に関する様々な統計資料を収集し、それらを整理分析して、調査対象国の特色を大観する。			◎		・東アジア各国の産業、環境条件、他地域との結びつき、人々の営みなどに関する地図や画像、文書や統計などの資料を収集している。	収集した資料 ワークシート
		・（中国を選んだグループの例） 中国を事例として、収集した統計資料を多面的、多角的に考察し、農業、工業、水産業、人々の生活、民族、宗教などに着目して、調査対象国の地域性を地誌的にとらえるための課題を設定する。		◎ ※3			・中国の地域性をとらえるために、農業、工業、水産業、人々の生活、民族、宗教などに着目して適切な課題を設定している。	ワークシート
		・（中国を選んだグループの例） 中国の工業の変化について、沿海地域で工業が発展した要因や背景などを、地域の環境条件や他地域との結びつきなどを踏まえて考察する。	◎ ※4				・設定した課題を、地域の環境条件と関連付て、地誌的に追究する学習に意欲的に取り組んでいる。	ワークシート 観察
		・（中国を選んだグループの例） 日本と中国の交流について、日本企業の中国への進出や経済援助に着目して、今後の交流の在り方や日本の役割について考察する。		◎			・設定した課題を、地域の環境条件と関連づけて追究する学習を通して、中国と日本の交流の在り方や日本の役割について考察している。	ワークシート
		・調査した国について、グループで調べた結果を、地図、表、グラフ、写真などを用いて表現し、資料としてまとめる。			◎		・調査した国の生活・文化を地域の環境条件と関連付けてとらえるために、地図や画像や文書の読み取り、統計のグラフ化や地図化などを通して、学習に役立つ情報を適切に選択して活用している。	作成した資料
	第６時 第７時 （発表）	・調査した国の生活・文化にみられる地域性や日本との交流などについて発表する。			◎ ※5		・調査した国の生活・文化を地域の環境条件と関連付けて追究し考察した過程や結果を地図化したり報告書にまとめたり、発表したりしている。	作成した資料、観察
	第８時 （まとめ）	・調査した国を例にして、異文化を理解し尊重することの必要性、近隣諸国との交流の在り方、広い視野からのアジアにおける日本の役割などについて 400 字程度にまとめる。	◎				・国際化の進展する近隣諸国や日本の動向を踏まえて、異文化を理解し尊重することの必要性、近隣諸国との交流の在り方や日本の役割をとらえようとしている。	ワークシート
		・定期考査の実施				◎	・東アジア諸国の地域性や日本との共通性、異質性について理解し、その知識を身に付けている。	定期考査

(2)　観点別評価の進め方

ア　考え方

(ｱ)　「関心・意欲・態度」について〔地理Ｂの評価計画表※４の事例〕（地理Ｂの大項目(3)現代世界の諸課題の地理的考察　エ　近隣諸国研究）

学習活動における評価規準「設定した課題を、地域の環境条件と関連付て、地誌的に追究する学習に意欲的に取り組んでいる。」について、自ら収集した資料を活用して地域の自然環境や産業に着目し、それらを人々の生活などと関連付けて、設定した課題を深く追究している場合は、「十分満足できると判断される」状況（Ａ）と評価する。また、「努力を要すると判断される状況」（Ｃ）と評価される生徒への指導の手だてとしては、課題追究に活用できる資料を具体的に指摘したり、課題を追究する視点や方法の例を示したりして学習に対する意欲を喚起する。

(ｲ)　「思考・判断」について〔地理Ｂの評価計画表※３の事例〕（地理Ｂの大項目(3)現代世界の諸課題の地理的考察　エ　近隣諸国研究）

学習活動における評価規準「中国の地域性をとらえるために、農業、工業、水産業、人々の生活、民族、宗教などに着目して適切な課題を設定している。」について、中国の地域性をとらえるために、例えば、「近年、工業生産額が増大しているが、中国の工業はどのようにして発展したのか」というような課題を設定している場合は、「十分満足できると判断される」状況（Ａ）と評価する。また、「努力を要すると判断される状況」（Ｃ）と評価される生徒への指導の手だてとしては、中国の貿易統計を農業、工業、水産業などそれぞれの産業に着目して読み取らせ、これらのうち、どのような産業に顕著な特色や変化がみられるかを再度考察させる。

イ　評価方法の具体例

(ｱ)　観察による評価方法　〔地理Ｂの評価計画表※５の事例〕（地理Ｂの大項目(3)現代世界の諸課題の地理的考察　エ　近隣諸国研究）

〔具体の評価規準及び評価の観点〕

「調査した国の生活・文化を地域の環境条件と関連付けて追究し考察した過程や結果を地図化したり報告書にまとめたり、発表したりしている」【資料活用の技能・表現】

〔評価の方法〕

観察する際の観点などを記載したチェックリスト（評価補助表）を利用するなどして、生徒の発表の状況を詳細に観察して評価する。

〔留意事項〕

・生徒に対する支援がおろそかにならないようにする。

・観察も指導の一つとして、生徒の学習を促進するように心がける。

・チェックリストなどを用いた観察結果だけではなく、自己評価カードなども活用し、事後の指導に生かす。

チェックリスト

日時	平成○○年○月○日　○校時	内容	○○の発表会
項目＼生徒	生徒①	生徒②	
発表時の位置や動き	◎	○	
話し方や声の大きさ	○	◎	
資料の提示の仕方	◎	△	
資料のわかりやすさ	◎	○	
得　点	18	10	

自己評価カード

１・２・３・４・５
そう思わない←どちらでもない←そう思う

1　発表会での発表は満足のいくものだった。
１・２・３・４・５
2　発表のために十分調べた。
１・２・３・４・５
3　発表を終えて、もっと調べなくてはと思った。
１・２・３・４・５

自己評価カードの得点を、評価の資料として利用するよりも、発表終了後の助言や、次の発表に向けた学習指導のための資料とするのが望ましい。

例えば、◎を２点、○を１点、△を０点として得点を算出する。満点を 20 点とした場合、16 点以上を「十分満足できると判断される」（A）、7 点～ 15 点を「おおむね満足できると判断される」（B）、６点以下を「努力を要すると判断される」（C）と評価する。（C）と評価される生徒への指導の手だてとしては、発表会終了後の助言の機会を利用して、他の生徒の発表を見て感心した点や工夫されていた点などを整理させ、自分の課題に気付かせて、次回の発表に向けて学習意欲を喚起する。

（ｲ）ワークシートによる評価方法　〔世界史Ａの評価計画表※１の事例〕（世界史Ａの大項目（３）現代の社会と日本　２つの戦争と平和）

〔具体の評価規準及び評価の観点〕

「第一次世界大戦と第二次世界大戦を中心にした２０世紀前半の国際政治の流れを踏まえて、現代の戦争の特質と平和の意義などについて考察できる課題を設定するとともに、設定に至る過程や追究の計画等について、適切に記入している」【思考・判断】

「自らの発表に対して、発表内容を踏まえて公正に判断して適切に評価している」【思考・判断】

〔評価方法〕

ワークシートの記述の点検・分析

〔評価の実際〕

・課題設定及び追究するための方法や計画が適切であるかを、ワークシートの記述を分析することで評価する。

・グループ発表時の自己評価から、わかりやすく工夫された発表になっているかを、ワークシートの記述を分析することで評価する。

世界史Ａ　「２つの世界戦争と平和」ワークシート

年　組　番　氏名　（グループ名　）

○設定した課題

○その課題を設定した理由

○課題の追究方法や計画などについてグループで出された意見

○課題の追究計画

調査・研究内容	場所・方法	注意事項

○先生からのアドバイス

世界史Ａ　「２つの世界戦争と平和」自己評価

年　組　番　氏名　（グループ名　）

○設定した課題を書いてください。

○設定した課題は興味深いものでしたか。	はい	普通	いいえ
○その課題について、計画的に追究できましたか。	はい	普通	いいえ
○課題追究のために、関係するデータや資料を集めることができましたか。	はい	普通	いいえ
○調べたことを発表のための資料にまとめることができましたか。	はい	普通	いいえ
○調べたことをうまく発表できましたか。	はい	普通	いいえ

○新たに追究したい学習課題があれば書きなさい。

〔留意事項〕

課題設定及び追究方法や計画がわかりやすくまとまって、工夫されており、自己評価における評価と具体的な記述がなされている状況を（Ａ）と評価する。まとまりに欠け、具体的な記述のない（Ｃ）の状況の生徒については、なぜそのようになったのかを質問することで、まとまりを持たせたり、以後に実施予定の単元で再度指導したりする。

(ｳ) テストによる評価方法　〔日本史Ａの評価計画表※２の事例〕（日本史Ａの大項目（２）近代日本の形成と１９世紀の世界　イ　明治維新と近代国家の形成）

〔具体の評価規準及び評価の観点〕

「近代国家の形成について課題を見いだし，欧米文化の導入と明治政府による諸制度の改革に伴う社会・文化の変化とを関連付けて多面的・多角的に考察している。」【思考・判断】

〔評価方法〕

テストの記述の点検・分析

〔留意事項〕

授業や課題追究学習で直接取り上げていなくても、生徒が主体的に課題追究をして、学習内容を多角的・多面的に考察していれば記述できる問題を出題をする。問１は、明治維新という時代に即して自分なりの考えが書かれていれば「おおむね満足できると判断される」状況（Ｂ）とする。さらに、近代化と関連付けて事例を記述していれば、十分満足できると判断される」状況（Ａ）とする。問２、問３も同様に、近代国家の形成に即した内容を自分なりの言葉で書いてあれば（Ｂ）とし、近代国家形成の諸課題に踏み込んで記述していれば（Ａ）とする。

ペーパーテスト

○次の３つの資料を読んで、問いに答えなさい。

(資料１)
右大臣の岩倉具視を特命全権大使とした使節団は、１８７１（明治４）年１１月１２日に日本を出発した。副使は木戸孝允、大久保利通、伊藤博文。団員は約５０名、その平均年齢は３２歳。この若さがあってこそ、欧米の新しい文化の受容も可能だったのであろう。目指すは欧米１４カ国である。後に各界で活躍する留学生約６０名も参加した。ただ 岩倉使節団は条約改正という主目的は達成することはできなかったが、１８７３（明治６）年９月１３日に数多くの事柄を学び、帰国した。

(資料２)
「脱亜論」～近代化の努力をしない国は欧米列強に分割されても仕方がないが、日本は独立を守るために近代化をすすめ、欧米諸国とともに東アジアの分割に加わるべきであるという考え方。

(資料３)
「今日の謀（はかりごと）を為すに、我が国は隣国の開明を待って、共に亜細亜（アジア）を興すの猶予あるべからず ・・・・・（中略）・・・正に西洋人が之に接する風に従て処分すべきのみ。悪友を親しむ者は共に悪名を免かるべからず。我は心において亜細亜当方の悪友を謝絶するものなり。」
（「時事新報」１８８５年３月１６日　福沢諭吉「脱亜論」）

問１　資料１について、岩倉使節団の若い団員や留学生が学んできた事柄はどのようなものと推測するか。あなたの考えを書きなさい。

問２　資料２について、「脱亜論」で述べられている「近代化」とは、どういうことなのか書きなさい。

問３　資料３のころから、日本国民の中に中国や朝鮮への蔑視が広まっていったと言われる。なぜ、そのような感情が広まっていったのかあなたの考えを書きなさい。

(3)　観点別評価の総括

ア　総括についての考え方

観点別評価の総括は、評価計画に従い、各観点ごとの評価規準に照らして評価した結果をまとめることにより、中項目（単元）末、学期末、学年末における各観点の評価を決定することである。

(ｱ)　中項目（単元）末においては、学習活動における評価結果を観点ごとに総括する。観点ごとの評価規準が複数ある場合の総括の方法としては、次の二つが考えられる。

a　評価結果をＡ、Ｂ、Ｃなどで表し、その個数で判断する方法。

b　Ａ＝３点、Ｂ＝２点、Ｃ＝１点などのように記号で表した評価結果を数値化し、これを合計したり、平均したりするなどして判断する方法。

(ｲ)　学期末においては、中項目（単元）ごとに総括した観点ごとの評価結果を基に行う場合と、学習過程における評価結果から総括する場合が考えられる。

なお、総括の方法は、(ｱ)のａ及びｂと同様である。

(ｳ)　学年末においては、学期末に総括した観点ごとの評価結果を基に行う場合と、中項目（単元）ごとに総括した観点ごとの評価結果を基に行う場合などが考えられる。なお、総括の方法は、(ｱ)のａ及びｂと同様である。

イ　学期末及び学年末の評価への総括

ここでは、ａの方法に基づいて、学期末に総括した観点ごとの評価結果を基にして、学年末に評定に総括する方法を例として示す。

表１

平成○○年度　○年○組○○番　氏名：○○　○○

学期	1学期				2学期					3学期			学年末の総括	学年末評定
中項目（単元）	中項目①	中項目②	中項目③	1学期の総括	中項目④	中項目⑤	中項目⑥	中項目⑦	2学期の総括	中項目⑧	中項目⑨	3学期の総括		
関心・意欲・態度	A	A	A	A	B	A	B	B	B	A	A	A	A	4
思考・判断	A	B	B	B	B	A	C	A	B	B	B	B	B	
資料活用の技能・表現	B	B	B	B	B	A	A	A	A	B	B	B	B	
知識・理解	A	A	A	A	A	B	B	B	B	A	A	A	A	

表２

ア	Ａが全体の６割以上を占め、Ｃが一つもない場合、その観点の総括をＡとする。
イ	Ｃが全体の６割以上を占め、Ａが一つもない場合、その観点の総括をＣとする。
ウ	ア、イ以外の場合、その観点の総括をＢとする。

表１の１学期では、中項目①～中項目③の３つを行っている。１学期の「関心・意欲・態度」の評価は、「中項目①＝Ａ、中項目②＝Ａ、中項目③＝Ａ」となっていて、表２から総括を「Ａ」としている。また、学年末の「関心・意欲・態度」の評価は、「１学期＝Ａ、２学期＝Ｂ、３学期＝Ａ」となっていて、同様に表２から総括を「Ａ」としている。このようにして評価した各観点ごとの学年末の評価結果は、「関心・意欲・態度＝Ａ、思考・判断＝Ｂ、資料活用の技能・表現＝Ｂ、知識・理解＝Ａ」となっていて、観点別評価の組み合わせは「ＡＡＢＢ」であり、表３から評定を「４」としている。

表3

組み合わせ					評定
A	A	A	A	－	5
A	A	A	B	－	5
A	A	A	C	－	4
A	A	B	B	－	4
B	C	C	C	－	1
C	C	C	C	－	1

表２のような観点別の評価を判断する基準や、表３のような評定の区分については、評価の客観性や信頼性を高める観点から、あらかじめ各学校において、学校や生徒の実態等を考慮し、評価方法を検討するなどして定めておく必要がある。